

豊能町小中一貫教育等充実検討委員会 第3回カリキュラム部会 議事録要旨

1. 日時：平成28年2月22日（月）午後3時から午後5時まで
2. 場所 東ときわ台小学校 会議室
3. 次第
 - (1) あいさつ（会長）
 - (2) 本日の趣旨について説明（事務局）
 - (3) 第4回教育環境部会の報告
 - (4) 協議
 - ①「カリキュラム部会の検討課題」について
 - ②全体でのグループ発表及び意見交流
 - (5) その他（事務局）
 - (6) あいさつ（副会長）
4. 出席者：委員14名、事務局5名

議事

1) あいさつ（会長）

第4回教育環境部会を開けていただいた。その議事録要旨（案）が机上有る。保護者の方に議論していただいた結果が出ている。今日はまとめてむかってご協力をお願いしたい。

2) 本日の趣旨について説明（事務局）

今年度最後のカリキュラム部会になる。3月4日の全体会にむけて方針を出していく。ボトムアップでいろいろな意見を拾い上げながら、豊能町の教育について、気持ちが一つになるように進めてきた。近隣から見ると遅れていると言えそうかもしれないが、先走ることなくみんなの思いをできるだけ近付けながらやっていきたいという思いがこういう形になった。豊能町は保・幼・園が町立である。就学前から義務教育終了までの子どもたちの育みを町の教職員みんなでやっていく中で方向性を出せたら良いと思う。来年度は、今日集まってきた意見で方向性を持って具体的に動いていく。忌憚ないご意見をいただきたい。小中一貫教育で何を大事にしていけばよいか、豊能町の子どもをどう育てていくか、そのような話が出ればと思う。

（副会長）

小中一貫に向けて豊能町が動き出す中で、まだまだ話をし、明らかにしなければならない課題がたくさんある。どういうところに課題を感じているのか、何を解決しなければならないのか出し合って、次年度につなげていけたらと思う。一つの方法として小中一貫に関わる知識的なことをいくつかお伝えしたい。小中一貫がなぜ始まったか。小中一貫が言われ出す前は、幼・小・中・高と段差があった。節目がないと伸びないと言われ、それがうまく機能していた時代が長かった。子どもたちは叱咤激励の中で、何とか環境に自分を合わせてやってきた。しかし時代が進むにつれて、ついていけない児童が出始めた。

これがいわゆる中 1 プロブレム。教科書が分厚くなる、英語が始まる、学習内容が急に難しくなることについていけない。学校文化の違い、規則が変わる、人間関係にうまくついていけない、新しい集団にとけこめない。中 1 で増えてくる不登校に対応するために、言われたのが小中一貫や小中連携によるスムーズな接続とか段差の解消である。教員サイドでも、小学校で積み上げたものが中学校にうまくつながっていない、もっと教科の内容を小学校と中学校でつないでいかなければならない、学習内容の系統性、教科の内容に軸足をおいた小中連携が言われ出した。そんな中で小中一貫や小中連携は、関心が高まったり沈静化したりしてきたが、新たな視点として出てきたのが地域。1つの小・中学校に9年間通う母校としての意味は大きい。そこに地域の方々が関わることによって、その間に地域についていろいろなことを学んでいく。地域の中に価値を見出してその中で生きていこうとする。地域を大事にする人間を育てる、地域をまきこんだ形の小中一貫で進められる。また最近新しく出てきたところでは学びのスタイル、小中をつなぐことによって子どもたちが主体的・意欲的に学ぶように作ってはいけないか。なぜ小中一貫を目指すのか、小中一貫を進めることで何ができるか。教科の中で、5年・6年・中1で区切って教科担任制にする等、教科のつながりの具体的なことができてくる。小中一貫にすると子どもの追跡、9年間の育ちをみることができ。行事を合同でするスケールメリット、中3の生徒が学校の行事を仕切るなど異年齢交流、生徒指導における小中連携、生徒指導の在り方も工夫できる。クラブ活動でも小中一貫において様々な可能性や工夫が出来る。デメリットについては、実際に始めてみて初めて分かるデメリットもある。小中一貫で歩みだしたところで人事・組織体制等問題が生じてくることもあるが、今はまだ予想するのは難しい。

(事務局)

小中一貫の船は動き出そうとしている。義務教育プラス就学前の取り組みも一緒に取り込み、どのようにしていくか。最初に教育委員会が出した方向性のところにも書いてあったと思うが、小中一貫の方向は向いている。今までは課題等いろいろな意見を出していただいた。豊能町で小中一貫を進めていくにあたって、どの方向をむいていったらよいか今日は話をしてほしい。地域学を主体にしながらやっている学校、段差をなくすために6・3制を4・3・2制、5・4制にする分け方等があるが、そういうことを大事にしていくのか。今日の討議のテーマとして、小中一貫教育のテーマ、豊能町の子どもを育てていくにあたってここを大事にしたいという視点、豊能町の売りを見つけてほしい。今後の部会の持ち方についても意見をいただきたい。

3) 第4回教育環境部会の報告

第4回教育環境部会議事録要旨(案)に基づき報告。

4) 意見交流 (出席者を学校、地区別に関係なくランダムにA・Bグループに分ける)

【Aグループより】

一番問題になったのは、教育委員会から船の話がでたが、本当にこの船に乗っていいのかというところの話からスタートした。イメージとして、小中一貫で人が減っていくイメージが強い。以前一体になった幼・保の前例を聞く中では、スタートは大変であったとのことだった。4名の管理職だったのが今は

2名になって、事務系の仕事も増えている。子どもに対してどうするのがよいかという議論は大事である。そのことにおいて小中一貫はマイナス面ばかりではないが、実際に自分たちで動く時にどうなのかということが議論になった。小中一貫によって人が減って教師が疲弊してしまうのが1番大きな問題ではないか。どんなに高邁な理想があったとしても、それが解決しないと前向きな議論ができない。今でさえ大変なのに、自分たちが何かを犠牲にしてやっていくことが本当に子ども達にかえっていくのか。そのことが一番大きな壁となっている。小中一貫をすることで、人が確保されることが必要ではないか。東は小中一貫を作る、しかし西が統合されていくことは、時期としては早いのではないか。幼保の合体の話の話を聞いているとタイミングの重要性が伝わってくる。どの時期にしていくかまだまだ論議が必要ではないか。小中一貫のメリットとして、小中お互いの先生が知り合うことによって風通しがよくなることは大事なこと。ただカオスの中でやっていると結局は子どもに跳ね返ってしまう。東は早く、先手を打つ。西はもう少状況を見ながら考えるのがよいのではないか。

【B グループより】

小中一貫教育を進めていく上で、これから先どんなことを考え、どんなことを話していくか議論した。保幼小中で違うところがあったままでは、教師にとっても子どもたちにとっても良くないという意見がでた。そろえるべきところはそろえて、どこにいても同じような経験ができる、そういうつながりを作る。縦のつながりとしては、保幼でしている体作りなど保幼小でやっていく必要があるという意見もあった。連絡帳を小学校だけでなく中学校でも書くようにしたり、中学校の試験勉強でしているような計画的な学習を小学校でもして計画的に学習や宿題に取り組んだり、発達段階に応じてこの年齢までにこの力をつけておくといったことを教科の内容だけに限らず、的を絞ってスタンダードを作っていく。これから先やっていくことで大事なことはないか。まず課題とかそういったものを洗い出して共有し、保幼小中見通したスタンダードやカリキュラムを作っていくことが、これから先考えていかないといけないことではないかという話になった。

【意見・感想】

(副会長)

実現までのロードマップ、何をどのようにしていくのか慎重に考えていく。最終的に担っていくのは先生方なので無理が生じると子どもに跳ね返ってしまう。ゴールに至るためにはこれだけのことをしなければならない、そのためにはこれだけの時間がある、というような形で議論を積み重ねていかなければならないと痛感した。人員削減と小中一貫、東と西の違い、これをどう調整していくかが一番大きな課題で難しいところ。具体的な瑣末と思われることも出していき、しっかり議論していくことが4月以降の課題である。それを積み上げていくことが無理のない小中一貫につながる。教育委員会も現場の意見を受けながら無理なく進めていくことをお願いしたい。

(会長)

今からでもできることがたくさんある。5月とか3月ではなくて4月初めに引き継ぎをし、実質的に連携接続して子どもの育ちを見るなど、具体的、小さなところから始められるのではないか。課題を見つけて子どもたちがどういう状態なのかお互い理解し合うことが大事である。この時まででこういう力

をつけるということをしっかりそろえておく子ども達は迷わずにすむ。来年度は課題の発見、ポイントの絞り込みというところにじっくりと時間をかけることが必要なのではないか。小中一貫になってもならなくても現段階でお互いに実践をそろえることはできる。

(事務局)

義務教育を終えるまでの子どもたちを豊能町でどう育てていくか。ハードがどのようなになったとしても、カリキュラム部会でのこのような話し合いは無駄にならない。課題の発見とポイントの絞り込み、利点を使えるような方向でできるとよい。

5) その他

3月4日(金) 小中一貫教育等充実検討委員会全体会 西公民館大会議室
答申案について。

6) あいさつ(副会長)

熱い議論お疲れ様でした。カリキュラムは教える中身の配列という印象が強いが、実際には教えるべき教育の内容を実現していくシステム、それも含めてのカリキュラムという位置づけになる。小中一貫で内容面だけ、理想だけを語りあうようではしんどい。ハード・人の配置も含めて議論ができたことはとても大事だった。小中一貫のカリキュラムはハードも人も含んでいる。そこを大事にして来年度も議論を進めていきたい。